



TITLE:

「図書館」と呼ばれている場について考える

AUTHOR(S):

ウィーガンド, ウェイン・A.; 川崎, 良孝

CITATION:

ウィーガンド, ウェイン・A. ...[et al]. 「図書館」と呼ばれている場について考える. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2003, 2: 163-170

ISSUE DATE:

2003-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43811>

RIGHT:

川崎：「図書館」と呼ばれている場について考える

「図書館」と呼ばれている場について考える

ウェイン・A. ウィーガンド 著・述

川崎良孝 訳

This Place We Call "Library"

Wayne A. WIEGAND

Yoshitaka KAWASAKI (tra.)

1. はじめに

この美しい日本、その美しい京都に招かれて発表できることを感謝し、こうした機会を得たことを大変名誉に思っている。この機会に、図書館学についてこれまでとは異なった考えを提示し、若干の問題提起をしてみたい。我われ図書館員は大多数の場合、「図書館という生活の中で」利用者について考えるように訓練されてきた。しかし私自身の研究によると、その視点をまったく変えるべきである。図書館の将来計画を作成するにあたって、「利用者の生活の中で」図書館について検討する方が、はるかに有益ではなからうか。特に次の2つの領域について考えてみたい。第1にコミュニティにおける物理的空間としての図書館が果たす多面的な役割の明確な把握、第2に読書という人間の本質的な行為および読書の社会的性格についての理解を深める必要性である。場としての図書館は何世紀にもわたって、アメリカおよび世界中の国々で、読書という人間に本質的な行為を促進してきた。

2. 「場」としての図書館

まず「場」(place)という概念を、私が現在取り組んでいる2つの研究に結びつけてみたい。現在、私は『小さな町の公立図書館：中西部の図書と読書、1890-1956年』(*Main Street Public Library: Books and Reading in the Heartland, 1890-1956*)という本を執筆している。この本はアメリカ中西部の5つの小さな町の公立図書館を取り上げて、各々のコミュニティにおける図書館の歴史的役割を評価しようと試みている。だれもが、アメリカ公立図書館は遍在する施設であると知ってる。21世紀に入る時点で、アメリカには16,000以上の公立図書館があり、最新の統計では2億8千万人のアメリカ市民の内、少なくとも3分の2は1年間に1回は公立図書館を利用している。これは「図書館」といわれる特定の1つの場所の利用者数にしては、相当大きい数値である。また現在、私はアメリカ公立学校図書館史の研究にも着手している。現時点で、おおよそ8万の公立学校図書館(私立学校図書館2万を除く)があり、最新の統計では、初等中等教育の生徒が年間に17億回利用している。この数値は、アメリカ市民が州立公園や国立公園を訪問した数の2倍に相当する。ここでも学校「図書館」といわれる1つの特定の場所への訪問者数はかなり多い。参考までにこの17億という数値に、公立図書館と大学

図書館への年間の入館延数を加えると、その数値は35億回に跳ね上がり、それはアメリカでの映画の年間観客数の約3倍に相当する。

私の研究では、公立図書館と学校図書館の「場」という概念を把握する必要があり、そのためにこの主題を扱っている重要な業績を読むことから始めた。この時代にあって、「場」を検討するためには、ドイツの政治哲学者ユルゲン・ハーバーマスを無視できない。ハーバーマスの著作『公共性の構造転換』¹⁾によると、18世紀に西洋の成長途上にある中産階級は、出現しつつある「公共圏」(public sphere)の統制を担うことによって、政府に影響を与えようとした。そしてこの「公共圏」は、結局は政府と市場が行使する力の間に、重要で適切な位置を見つけた。この公共圏の中で、西洋の中産階級は自分たち特製の合理(reason)を展開させ、時間の経過とともに、機関のネットワークや一連のサイト(例えば、新聞や定期刊行物、政党、学術協会、それにさまざまな団体)を創り出した。そうしたもののうち、またそうしたものを通じて、中産階級は自分たちの思考方法を洗練させ、政府や市場が決して無視できない「公益」(public interest)という概念を育てていったのである。

すべての強力な思想と同じように、ハーバーマスの理論は議論を巻き起こした。ただちに他の研究者が、多くのコミュニティやグループを取り上げて、この合理化された言説が実践されていた機関やサイトの分析に着手した。こうしたコミュニティやグループは、政治的イデオロギーや市場活動のいずれにもたいして関わりがなかったものの、こうした機関やサイトの分析から、物理的空間としての「場」の役割について、洗練した概念が生まれることとなった。しかし私の知るところでは、主として英語圏の図書館学研究で「場としての図書館」(library as place)というコミュニティでの役割を深く分析するために、「公共圏」についてのハーバーマスの理論を適用した研究者はいない。私の研究、すなわちアメリカの小さな公立図書館と公立学校図書館の歴史的研究に際して、ただちに私は「場としての図書館」という概念を取り込む必要があると考えた。

3. 都市における「読み」の役割

私自身の勉強のために読んだのは、ディヴィッド・ヘンキンの『都市での読み：南北戦争以前のニューヨークにおける書かれた言葉と公共圏』²⁾であった。この本は、ハーバーマスの理論を利用して、特定の時点と場所における物理的空間に注目し、特定の「公共圏」での人間の行動、つまり今では当たり前のことになっているサイン(city sign)を読むということを分析したものである。おそらくあなたがたの多くが、初めてここ[京都大学附属図書館]を訪れたとき、京都市内や会場周辺でサインを読んだだろう。ヘンキンの発見を簡単にまとめると次のようになる。ニューヨークは1825年当時の小さな港町から、1865年には多文化の大都市に成長した。ヘンキンは新しい形態の読み(reading)——街路標識や建物の名前を含んでまさに出現し始めたもの——が出現する物理的な空間を見つけた。そうしたものは、すべて屋外に注意深く置かれていた。ヘンキンの推測によると、公的な場所に掲示されているメッセージを読むという行為において、人びとが語を読むというその読み方が、多くの点でコミュニティの変容を助けるということである。例えば、住民や訪問者が1人でサインを読み、そののち路上の

他人に知られることなくどんどん進んだり、またときには、見慣れたサインを示す質問をすることで、見知らぬ人と結びついたりするということである。

ヘンキンの視点に注目する必要がある。ヘンキンは19世紀中葉のニューヨークの住民や訪問者を、単に都市での情報の消費者とは把握せず、変化する都市でのダイナミックな環境において、こうした読みの行動がもたらす、より広範な社会的目的を理解するために、いっそう深く検討したのである。ヘンキンによると、こうしたサインを読むことは教育であり、そこから人びとは自分のやり方、また自分のペースで、グループや個人で学ぶ。私は20世紀初頭の小さな町のアメリカ公立図書館や20世紀末のアメリカに偏在する公立学校図書館を研究している。そうした研究者にとって、特定の場所や特定の時点において公共圏として構造づけられた中で、機関が果たす役割についての思想と概念が、なぜ興味深いのか理解してもらえらるだろう。またあなたがたが今日おこなったサインの「読み」が示すダイナミックスも理解できることと確信している。この一連のダイナミックスについていえば、私は日本語を読めないのでアクセスができず、言葉を換えて言えば、今日この場で、私はあなたがたが個人あるいはグループで行った「読み」に参加できなかった。私は京都市での掲示を読むという社会的性格を有する経験をするできないのである。

4. 図書館と「有用な知識」

とはいえヘンキンの業績を分析することで、読書行為についての私の考えが補強された。そしてこの読書という行為は、私たちが「図書館」とよぶこの場と分かちがたく結びついていると断言できる。私たちが「図書館」とよぶ場での、読書の役割を定めるについて、まず最初に図書館界が「情報」(information)をどのように定義しているのかを検討する必要がある。西洋の図書館員は、「情報」の定義を多分に17世紀のヨーロッパで定められた規則に準じて形成してきた。この時代は哲学者ミッシェル・フーコー (Michel Foucault) によれば、いわゆる近代の新しい秩序が人びとの日常生活を、仕事と余暇に分離した時代である。そしてときの経過とともに、仕事に関連する問題を扱う情報を最も重要とみなすようになっていった。あるいは人びとが、知識と情報を持つ市民、知的な消費者、それに教育ある人びとになるのを助ける情報を最重視する。そして17世紀以来、我われはそのような知識をしばしば「有用な知識」(useful knowledge)と呼んできた。

図書館の歴史が物語るように、「有用な知識」を収集、組織化、利用できる状態にすることは、館種を問わずアメリカの図書館が数世紀にわたって最も求めてきたことである。例えば、フィラデルフィア図書館会社 (Library Company of Philadelphia) を1731年に創設するにあたって、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は最初の図書発注をロンドンに行った。この発注リストを見ると、小説は含まれておらず、その代わりに辞書、文法書、地図、歴史書、科学や農業の本、すなわち「若い職人や商人の好みや目的にかなう」本に集中していた。たちまち「有用な知識」という語を構成しているものが情報の定義となり、その定義が西洋の図書館学の言説の発展を支配するようになった。それは19世紀末にメルヴィル・デュイ (Melvil Dewey) が構想した世界最初の図書館学校、すなわちニューヨーク市のコロンビア大

学図書館学校のカリキュラムに由来する。この図書館学校のカリキュラムは次の2点に重点を置いていた。1つは私たちが図書館と呼ぶ機関の運営方法、いま1つは図書館利用者が必要とする「有用な知識」の獲得を助ける目的で、開発と実践が必要とみなされていた専門技量である。

私は、西洋の中産階級の司書の先輩たちが「有用な知識」の内容として定義づけたことが、それ以後の図書館員の思考の枠を設定したと主張する。そしてこの見解は、多分に図書館という生活の中で図書館利用者をみることを奨励してきた。そのため、人びとが場としての図書館に結びつく理由を理解することに無関心だった。私たちは、最も価値のある社会的役割、すなわち司書職の責任を追求してきた。その責任とは、私たちが最も重要だとみなした「有用な知識」や、利用者が求めるべきだと私たちが考える類の情報に図書館利用者を導くことであった。しかし私に言わせれば、とくに世界中の人が読書を愛する理由についてのいっそう深い説明をかえりみたとき、そこにはそれ以上のことがある。利用者の観点から場としての図書館に焦点をあてることで、図書館利用を選ぶ幾多の人にとって欠かせない機関となっている、多面的な使われ方を識別することができるように思える。

5. 読書の社会的性格と読書行為

読書のためのサイトとしての図書館、およびこれまで「有用な知識」と考えられてはこなかったタイプの読書に焦点を当ててみよう。物語(story)を読むことは多分に余暇活動と考えられてきた。そのため「有用な知識」という定義の範疇に入らないと言える。図書館業務の最も大きな部分が、物語の読書を容易にすることにあるという現実にもかかわらず、司書職のサービスとして、物語の価値は決して高くはない。アメリカ図書館協会の研究統計部(Office of Research and Statistics)の評価では、昨年だけで1億5千万人が公立図書館を訪れて本を借り出し、その65パーセントから75パーセントは小説、すなわち物語という形態の典型であった。しかしながら図書館情報学の英語文献の場合、人文科学の中で成長をとげている分野——4半世紀の歴史を持ち、物語を読むという主題を多様な観点から研究する分野——の研究業績を多分に無視してきた。読みの研究者は、誰がどのような物語を読み、その理由はなぜかといったことを分析する。その場合、ジェンダー、人種、階級、出生国、それに信仰に基づく情報文化といった側面から、読者が日常生活の中で読むものについて複雑な手段を用いていることに焦点をあててきた。

読書という行為は、場としての図書館の重要性と大いに関係している。読書行為のこの1つの側面は、私たちが読書と呼んでいる文化的に本質的な人間の行為の社会的性格に関係している。エリザベス・ロングは論文集『読書のエスノグラフィー』⁹⁾の中に、「集合行動としてのテキスト解釈」という見事な論文を執筆しており、少なくとも西洋世界での個人読者(solitary reader)という近代の概念が、多くの種類の読書の社会的基盤を無視していると主張している。そして読書という行為を基礎づける「社会的基盤」には、共通する解釈の枠組み、一連の機関への参画、社会的関係、それに経済活動が含まれると述べている。そののちロングは、グループの構成員が、どのようにして自分の解釈を、自分たちお互いと、自分たちの文化と、それに

自分たちの社会と取りなしていくのか示している。ロングは自分の研究結果をカルチュラル・スタディーズの研究と結びつけている。カルチュラル・スタディーズの場合、社会的読書という自由意思の行為において、読者は「テキストの内に入ったり、外に出たり」し、自分の生活に適切な意味を「自分のもの」(appropriate)にする(研究者によっては「密漁」(poach)という言葉さえ使う人もいる)。このように読者は意味をコントロールできるが、一方、私のような研究の専門家が読者の解釈の「正しさ」(correctness)をチェックできない。そのため読書という行為は楽しくなり、力を付与し、社会的結びつきにもなるのである。

もし読書という行為が人びとを結びつける「場」を提供するというロングの考えが正しいならば、この論理を「場としての図書館」に延長できないはずがないだろう。「読書という行為」を、図書館という生活の中での利用者よりも、利用者の生活の中での図書館に焦点をあてて活用するなら、場としての図書館はコミュニティを作るための空間として重要な役割を果たしているといえる。しかしこの役割は、これまで多分に見過ごされてきた。もう少し合衆国の統計を用いて、私たちが「図書館」と呼ぶ場での読書がどの程度のものか示してみたい。大学図書館は1年間に1億8千万冊の本を貸出す。これは大学のフットボール試合の全観客数の6倍以上に相当する。公立図書館での夏期読書プログラムに参加する子どもの数は、リトルリーグに参加する子どもの数を下回ってはいない。

私は、場としての西洋の図書館という制度は、読書への愛によって支えられ、コミュニティで常に大きな役割を果たしてきたと確信している。それでも、私たちアメリカ人は依然としてそのすべての側面に気づき始めてさえいない。おそらくロバート・D. パトナムの『1人でのボーリング：アメリカのコミュニティの崩壊と再生』⁹⁾から、いくつかの示唆を得ることができるだろう。パトナムの仮説によると、この4半世紀にアメリカ人は家族、友人、近隣、クラブとの結びつきを次第になくし、自ら「社会資本」(social capital)を共有する機会をなくしている。そして「社会資本」は、市民および個人の健康に欠かせず、コミュニティとの強い結びつきを構築するのに不可欠なものだという。パトナムによると、不幸なことに1970年頃からアメリカ人は、(隠喩的に言えば)「1人でボーリング」をしているのである。

残念なことに、パトナムはこの本で図書館には何ら触れていない。それでも私はこの本を精読するとき、常に「場としての図書館」を考え、常に図書館入館者数に思いをはせた。また常に、図書館利用者の生活の中での図書館という理解を深めるために私が活用している、読書の社会的性格と読書行為についての研究業績が、ほかにも適用できるのではないかと考えていた。パトナムは、市民生活への参加の減退が社会資本の交換を妨げていること、およびその結果として生じていることについて検討した。私は「場としての図書館」とそこでなされる読書という役割りが、「空白」(vacancy)を埋める働きをしようのではないかと問いかけ、可能ならばいくつかの事例を示したいと思う。

6. コミュニティにおける「図書館」の社会的役割

パトナムは、「実験社会心理学者は最も日常的な社会的相互作用であっても、双方向性に強力な効果を及ぼしようという驚くべき証拠を明らかにした」と指摘している。パトナムによる

と、「双方向性」(reciprocity) は人びとを結びつける本質的な糸である。パトナムは「双方向性」という言葉で、「あなたからの具体的な見返りを期待せずに、あなたのためにそれをしてしましょう」ということを意味しており、それはつまり「誰か他の人が同じような考えで自分に何かをしてくれるとの固い期待」があるということである。パトナムによると、20世紀末から21世紀初頭のアメリカは、一般的な双方向性の減少で特徴づけられる。しかし私は、20世紀のほとんどを通して（そして21世紀初頭になっても変化しているとの証拠を見つけることはできないのだが）、アメリカの図書館はこうした日常的な社会的相互作用が生じる場であり、またそうした相互作用を奨励する場であると考ええる。事実、「場」としての図書館は、コミュニティの双方向性を目立たせている。

パトナムは、コミュニティの結びつきを強めるのに重要な、さらに2つの糸——誠実さと社会的信用 (honesty and social trust) ——を示している。パトナムによると、今日のアメリカ社会は、社会の統制と論争の解決のための公式メカニズムに多くの資源を投じているとなる。このことは他の公的機関に当てはまるものの、私たちが図書館と呼ぶ場には当てはまらない。アメリカの図書館は、コミュニティが所有する資料をサイトで利用する人、（それにこちらのほうが圧倒的に多いのだが）サイトの外での読書を好む場合は館から持ち出す人を信用している。それがために、図書館は利用者にたいして、コミュニティの誠実さと社会的信用を具体的に示す多くの機会を与えている。

パトナムは、「近隣社会やコミュニティといったレベルでの社会資本は、子どもの育成に影響がある」⁹⁾と指摘している。すでに指摘した統計、すなわち学校図書館の利用とほとんどの公立図書館が実施している夏期読書プログラムは、この問題を扱っているが、他にも一般的に広まっているイメージがこの点を敷衍している。どれくらいのアメリカ人（世界の人と言うまでもない）が、子ども、親、祖父母として、子どもが図書館で読んだり、視聴したりする資料の選択に参画しているのだろうか。世界中でどれくらいの人々が、子ども、親、祖父母として、生涯を通じての絆を育成する助けとなる家庭といった場で、これらの資料を読んだり、視聴したりしているのだろうか。この1つのダイナミックスを見るだけでも、コミュニティの場としてのアメリカの図書館が、地元の近隣社会にとって非常に重要だということを理解するのは難しくない。この場合でも、こうしたことが見えてくるのは、図書館利用者の生活の中での図書館を見ること、および図書館が促進する読書の社会的性格と読書行為を見る場合に限られる。

この時点で、私の研究『小さな町の公立図書館』に戻ろう。中西部の1つ1つの小さな田舎町の公立図書館について、1890年から1956年まで、コミュニティに最初に映画館、自動車、蓄音機、ラジオ局、音声付きの映画、それにテレビが出現した年を、地元新聞のマイクロフィルムを利用して丹念に調べた。それから、そうした時期を図書館関係文献に現れた言説と付き合わせた。そうした文献をみると、多くの図書館指導者がアメリカの図書館について、新しいコミュニケーション技術の影響による暗い将来を予測していた。続いて私は、各館レベルの統計に戻り、貸出冊数と入館者数を計算した。そこからわかった結果は、こうしたコミュニケーション技術のいずれが導入された場合であっても、図書館利用に顕著な長期的影響をもたらさなかったということである。図書館利用に否定的に作用する要因として1つだけ発見したことは、技

術ではなく、図書館幹部の消極性であった。

状況は変化したのだろうか。この講演の原稿を準備するために、アメリカ図書館協会の研究統計部長メアリー・ジョー・リンチ（Mary Jo Lynch）に連絡をして、合衆国の貸出冊数、入館者数、レファレンス件数について過去10年間の比較数値を求めた。この10年間といえば、情報技術が図書館業務に多大の影響を与えたと考えられている。また図書館界の指導者の中には、制度としての図書館の終焉を予想する人もいた。こうした時期にあって、私が発見した数値はどういうものだったのだろうか。公立図書館の場合、1990年の貸出密度は5.6冊だったが、1999年には6.6冊に増加し、入館者は同じ期間に人口1人あたり3.1回から4.2回に増加している。そしてレファレンス件数は1人あたり0.9件から1.1件に増加した。要するに、最も数が多く、伸びも大きいのは、私が「読書」と「場としての図書館」と定義づけるカテゴリーであった。こうした数値は、人びとが図書館を利用する方法を明示していると思うが、不幸なことに、利用者は図書館利用の理由を私たちに多く語ってはくれない。

7. おわりに

公立図書館、学校図書館、大学図書館といった館種を問わず、大多数のアメリカの図書館を通り抜ければ、人びとが個人やグループで読書をしたり、話したり議論をしたり、図書館職員に相談したり、図書館のサービス、蔵書、空間を使ったり、本を借り出したり返却したりしていることがわかる。アメリカ人が「図書館」と呼ぶこの場は、こうしたすべての相互作用（interaction）を可能にする。そしてアメリカの場合、1世紀以上にわたって、図書館はこうした相互作用を促進してきた。おそらく日本の図書館も、何世紀にもわたって、社会資本の交換とコミュニティの建設に多面的な方式で大いに貢献してきただろう。もっともしばしばこの点は見過ごされてはいる。アメリカの図書館は、従来からのデータ収集の実践という価値よりも、利用者の生活における場としての価値の方が大きく、この点について、いまや実証できる状態になっている。しかし残念なことだが、こうした証拠は現在の図書館情報学の思考からはほとんど出ていない。あるいは図書館情報学の「情報中心」（infocentric）の研究からも出現していない。私の意見では、両者ともに利用者の生活の中での図書館を看過し、読書に果たす図書館の役割を無視しているからである。また両者ともに、図書館という生活においてほんの少数しか占めない情報システム、要するに「有用な知識」に特典を与える情報システムに、あまりに焦点を当てすぎているためである。

註

1. Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Luchterhand Verlag, 1962（『公共性の構造転換』細谷貞雄訳、未来社、1973）；rev. ed., Suhrkamp, 1990（『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーの研究』細谷貞雄・山田正行訳、1994）。
2. David M. Henkin, *City Reading: Written Words and Public Spaces in Antebellum New York*, New York, Columbia University Press, 1998.
3. Elizabeth Long, "Textual Interpretation as Collective Action," in Jonathan Boyarin, ed., *The*

Ethnography of Reading, Berkeley, California, University of California Press, 1993, p. 180-211.

4. Robert D. Putnam, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York, Simon & Schuster, 2000.

5. *ibid.*, p. 305.

本稿は2002年8月1日に京都大学附属図書館で行われた講演をもとにしている。なお、この講演会は、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、京都大学附属図書館、日本図書館研究会、近畿地区国公立図書館協議会の共催で、約80名が参加した。